
ウルトラウーマンデイジー～コンバットバトラーの世界～

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラウーマンデージー／コンバットバトラーの世界／

【Nコード】

N0866L

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

獅子座からやってきた宇宙人のデージー。彼女は地球人のヒナギクに危機が訪れようとしていることを告げ、彼女と一つになり……。

——ウルトラウーマンの活躍をご覧ください！

第1話：獅子座から来たヒナギク

地球から九千八百光年ほど離れた獅子座の銀河。そこにある惑星から、全長五十メートル前後の宇宙人が一人、地球に向けて光速を遥かに凌駕する速度で飛び立った。その宇宙人は、女性らしい顔付きで、体色は銀とマゼンタ。胸部にはカラータイマーが装着されている。地球人はこのような姿の宇宙人を、ウルトラマン又はウルトラウーマン、と呼んでいる。

「あれが地球か。母星に似て綺麗だわ。この星を侵略しようと考える輩が居るなんて信じられない」

宇宙人はそう口にしながら地球へと進入した。

東京——負け犬公園のジョギングコースを金の髪留めを付けた桃色長髪の端麗な少女が走っていた。

彼女は桂 ヒナギク。杉並区に聳える私立白皇学院の二年生で剣道部の部長を兼任している生徒会長だ。彼女はこの公園で毎日走り込みをしている。そして今日はタイムアタックに挑戦中。

そんな彼女を上空から見下ろす宇宙人。

「あの子、ただ者じゃないわね。よし」

宇宙人はその巨大な体をヒナギクと同じぐらいにまで縮めると、彼女の前に降り立った。

「ああ!？」

全力疾走中のヒナギクは急には止まれない。そのまま宇宙人に突っ込み、押し倒して地面に転がった。

「痛!」

ヒナギクは起き上がると宇宙人を見据えた。

「大丈夫?」

「ええ、何とか」

「貴方、宇宙人？」

宇宙人は起き上がり様にヒナギクへ向く。

「私は獅子座から来たデイジーって言うんだけど、この星で活動するために暫くの間、貴方と一つになりたいんだけど、いいかな？」

「何が目的？」

「今、この地球に危機が迫ってるの」

「危機？」

「悪い宇宙人がこの星を侵略しようと狙ってるのよ。私はそれを阻止しに来たの」

ヒナギクは考えた。

初対面の人の言うことを簡単に信用してもいいものだろうか。

「……断るわ。突然現れた初対面の貴方を信用して、体に乗っ取られて地球侵略のために利用されたら嫌なもの」

「そうよね。うん、じゃあこれを渡しておく」

自らをデイジーと名乗る宇宙人は宇宙金属で作られた雛菊を取り出してヒナギクに渡した。

「困った事が遭ったらそれを掲げて。必ず助けに行くから」

「分かったわ」

ヒナギクは雛菊を懐へ仕舞った。

デイジーは飛び立ち、空の彼方へ消え去った。

（あの宇宙人、小さい時にテレビで見たウルトラマンに似てるわね。しかも空飛んだし。……まさかね）

「……！？」

背後に殺気を感じたヒナギクは振り返った。その先には、地球上に存在しない筈の生物の姿があった。そいつは蚊にそっくりな怪人だった。

「何者！？」

「俺はキュレックス星からこの星を征服するためにやってきたモスキートだ。見たところお前は強そうだ。特別に俺のシモベにしてやるっ」

モスキートはヒナギクに飛びかかった。

ヒナギクは素早く飛び退き、飛来した木刀の正宗を掴み取る。

「あの人の言つてた事は本当だったみたいね」

ヒナギクはモスキートの懐へ入り込んで正宗を振るつた。

「ぐわっ！」

体から火花が散ると同時に怯むモスキート。

「シモベにするのはやめだ！ 殺してやる！」

怒ったモスキートは巨大化を遂げた。

「嘘でしょ！？」

「ガハハハハ！ これで貴様は手も足も出まい！ 踏みつぶされて死ね！」

全長五十メートルほどあるモスキートがヒナギクを踏みつぶしにかかった。

頭上に迫る巨大な足。ヒナギクが死を覚悟した刹那、頭に先ほどの言葉が過^よぎる。

『困った事が遭^あつたらそれを掲げて。必ず助けに行くわ』

ヒナギクは懐から雛菊を取り出した。

（一か八か！）

ヒナギクは雛菊を頭上に掲げる。すると、それが光に変わって彼女を包み込むと同時に辺りの時間が止まった。そして巨大化した先ほどの宇宙人が現れた。

「決断の時が来たわね。どうする？」

ヒナギクはデイジーを見上げる。

「貴方を信じるわ。私と合体してあの怪獣を！」

デイジーは頷くと、額のビームランプからヒナギクにビームを放つた。

「うわっ！」

ヒナギクはデイジーのカラータイマーに引き寄せられ、そして吸い込まれてしまった。

「ふん……！ はあっ！」

止まっていた時間が動き出し、デイジーは光を衝撃波に変換してモスキートを吹っ飛ばす。

「ぐわっ！」

地面に転がるモスキート。

「何だ貴様は！？」

デイジーは振り返り様に答える。

「この星の侵略活動を阻止するために派遣されたスペースポリスよ、すつくと立ち上がるモスキート。

「何だか知らんが俺の邪魔をする奴は誰であろうと殺す」

デイジーは身構えた。

「俺の邪魔をした事を後悔させてやる！」

モスキートはデイジーの横顔を殴りつけた。

「ぐっ！」

後方に吹っ飛び、地面に倒れるデイジー。だが直ぐに立ち上がる。

「オラ！」

モスキートの蹴りが腹に決まり、デイジーは倒れた。

「へっ、口だけか？」

モスキートは横たわるデイジーを空中に蹴り上げ、追撃で地面に叩き落とした。

「ぐあっ！」

激痛に苦しむデイジー。

モスキートは着地して笑みを浮かべる。

「その程度？」

「あ？」

「その程度では地球侵略なんて無理ね」

デイジーはネックスプリングで立ち上がり、モスキートに体当たりをした。

「ぐおっ！？」

倒れるモスキートだが、直ぐに立ち上がって反撃する。

デイジーは放たれた一本の拳を手の平で受け止めると、背負い投

げでモスキートを地面に叩きつけた。

「がはっ！」

体液を吐き出すモスキート。

「この野郎！」

立ち上がったモスキートがデイジーに突進する。

デイジーはバックフリップで攻撃をかわした。

「火加減はウエルダン？ ミディアム？ それともレア？」

「畜生！」

恐れをなして空へ逃げるモスキート。

「待ちなさい！」

デイジーは脹ら脛の反動ジェット袋による飛行で追尾する。

「付いて来るんじゃないか！」

モスキートが光弾を放った。

デイジーは目にも留まらぬ速さで光弾をかわし、モスキートの前に先回りした。

「何！？」

慌てて急ブレーキ。モスキートは停止した。

「あの……見逃してはくれないですかね？」

「くれない」

デイジーは腕でL字を作って光線を発射。モスキートを木っ端微塵に吹き飛ばした。（私、飛んでる？）

下を見たデイジーは目眩を起こした。

（飛べても高いのはやっぱり怖いわ）

デイジーは徐に降下して着地すると光に包まれてヒナギクに戻った。

「ヒナギクさん」

「はわ！？」

驚いたヒナギクの胸からハートが飛び出した。

「な、何？」

振り返ると、水色の短髪に女の子のような顔付きの同い年の男の

子が立っていた。

彼の名は綾崎 ハヤテ。ヒナギクのクラスメイトで彼女が秘かに想いを寄せている相手である。

「ヒナギクさんも巨人を見に来たんですか？」

「巨人？」

「ええ。さっきここでウルトラマンのような巨人が怪獣と戦ってたんですよ」

「わ、私は知らないからね」

疑問符を浮かべるハヤテ。

「えっと、じゃあ私は用があるから失礼するわね」

ヒナギクはハヤテに背を向けて歩き出した。

「待って下さい！」

立ち止まって振り返る。

「何？」

「ヒナギクさんは、好きな人は居るんですか？」

「藪から棒に何よ？」

「教えて下さい。居るんですか？」

貴方よ、とは負けた気がするから言えない。ヒナギクは頬を赤らめて言う。

「い、居るわよ。バカで鈍感で頼りなさそうな感じだけど、いざという時に凄く格好いい男の子が」

遠回しにハヤテの事だ。

「そうですか……」

ハヤテは残念そうな表情で立ち去ろうとする。

「待って。ハヤテくんの好きな子って誰？」

「いえ、もういいんです。諦めましたから」

「ダメよ、告白しないで諦めるなんて。もしかしたらオツケイもらえるかも知れないじゃない」

ヒナギクは既に気付いていた。ハヤテが自分を好きであると。「そうですか？」

ハヤテはヒナギクに向き直る。

「じゃあ告白しますけど、僕はヒナギクさんのことが好きです」
暫しの静寂。だがハヤテがそれを破った。

「ヒナギクさんは僕のこと嫌いですよね？」

「いや、寧ろ大好きよ」

そう言った直後、真っ赤に染まったヒナギクの顔から湯気が噴き上がる。

「ええ!？」

驚き戸惑うハヤテ。

ヒナギクは顔色を戻して訊ねる。

「いつからなの？」

「木の上からヒナギクさんが飛び降りて僕の顔面を踏んづけたあの日からです」

「要するに、初めて逢った日ね」

「ええ。あの時、ヒナギクさんがとても可愛いから胸がキュンとなつて」

「か、可愛いってそんな……」

頬を赤らめるヒナギク。

「ヒナギクさん、僕と付き合ってくださいますよね？」

「ん……、どうしようかな？」

「さっき僕のこと大好きって言いましたよね!？」

「今は関係ないでしょ？」

「う……」

「そうね。私の言うことを何でも聞いてくれるなら付き合ってもいいかな」

「それは、僕にヒナギクさんの召し使いになれと？」

「そう言ってるつもりだけど？」

「むう……」

「嫌なの？」

「いえ、ヒナギクさんが望むのなら喜んで召し使いになりましょう」

「本当に？」

「はい」

「ハヤテくん」

「はい、何でしょう？」

「契りを交わしましょう」

ヒナギクは自分の唇をハヤテの口元へ近付けた。

ハヤテはヒナギクに唇を授ける。

長いようで短い接吻キッスの時間。

二人は互いに離れた。

「それにしても驚きました。ヒナギクさんが僕のことを好きだったなんて」

「私だって驚いたわよ。ハヤテくんが私の美貌に落ちるなんてね」

「でもいいんですか？ 僕と付き合って」

「何ですよ？」

「学校には”ヒナギク親衛隊”なるものが結成されてるんです。彼らに知れたら僕はきつと死にますね」

「何よそれ？」

「ヒナギクさんは可愛いですから、狙ってる人が後を絶たないんです」

「そう言えば、毎日下駄箱に大量のラブレターが入ってるわね」

「それどうしてます？」

「一つ一つ返事を書いてるわ」

「大変ですね」

「あ、そうだ。早速ハヤテくんに命令しちゃおうかな」

「何です？」

「ラブレターの返事を書くの手伝って」

「何で僕が？」

「私の言うこと何でも聞いてくれるんだったわよね？」

「うゝ……」

「手伝ってくれる？」

「……はい」

ハヤテは不満そうな顔で返事をした。

「不服なの？」

「滅相もないです！」

「命令に背いたらお仕置きだからね」

「イエッサー！」

「じゃあ私は帰るね」

ヒナギクはそう言って立ち去った。

ハヤテはその場に座り込んだ。

「好きって言わなきゃよかったかな？」

第1話：獅子座から来たヒナギク（後書き）

スーツアクション

ウルトラウーマンデ이지ー：桂 ヒナギク、綾崎 ハヤテ（代理）

モスキート：綾崎 ハヤテ

第2話：運命の再会

登校中のことだった。

「ん？」

ヒナギクは光り輝く不思議な石を拾った。

（何かしら？）

その時、脳裏に鮮明な映像が浮かんだ。

赤い帽子と赤い服と赤いズボンの白い髭のお爺さんが現れて言う。
「それはお前の石だ。絶対に無くしたり人に渡したりするな。まあ、お前が無くしたところで、ワシは八個持つてるがな」

サンタクロースという格好のお爺さんはスーッと消えてしまった。

（何今の？）

更に、どこからともなく助けを求める声が聞こえてくる。

「どこ！？」

ヒナギクは駆け出した。

助けて。一緒に出たいよ。もう一度、私を呼んで。

（この先！？）

三百六十五本の柱が建つアブラクサスの森を駆け抜け、崖の上に
ロイヤルガーデン
聳える王族の庭城に辿り着いた。

重々しい扉を開けて中に入ると、金髪縦ロールの同い年くらいの
少女が階段に腰掛け手摺りに寄つ掛かつて泣いていた。

彼女は天王州 アテネ。十年ほど前に一緒に暮らしていたハヤテ
と様々な擦れ違いと誤解で決別して以来、ずっとここで泣き続けて
いた。

ヒナギクはアテネの前に立つ。

「何の用？ お宝が欲しいならご自由にどうぞ。それとも一生遊ん
で暮らせるほどの財産が目当て？ それなら地下室にあるから持っ
て行きなさい。私にはもう必要ない」

「貴方が呼んだ」

「へ？」

疑問符を浮かべるアテネ。同時に頭のアホ毛がクエスチョンマークになった。

「貴方はここから出たがつてる。そして逢いたい人が居る」

「ええ、とても大切な人よ」

アテネの脳裏に幼少のハヤテが映る。

「貴方、ハヤテくんの知り合い？」

意外な質問。

「貴方、ハヤテを知ってるんですの？」

「ええ、まあ……」

「お願い、彼を連れてきて」

「逢いたいなら行けばいいじゃん」

「出来ないの。私はここから出られないの。神様が怒って私をここに閉じ込めたの。ここを出るには――」

アテネはこの城の外へ出る方法をヒナギクに教えた。

「成る程、正しき心で柱を倒せばいいのね。行くわよ」

アテネの手を掴んで城を出るヒナギク。

二人の前にハヤテの幻影が現れて言う。

「この城で一緒に住みませんか？」

「何で貴方なんかと一緒に住まなきゃいけないのよ!？」

ヒナギクは正宗で幻影を振り払い、正面の柱を真つ二つに切り倒した。

「こつちよ!」

アテネを引いて駆け出すヒナギク。アブラクサスの森を抜け出した。

「出られた？」

「これで貴方は自由の身よ」

「有り難う。私は天王州 アテネ。貴方は？」

「桂 ヒナギクよ」

アテネはヒナギクの頭に手を翳した。

「これはお礼です」

ヒナギクの体力と攻撃力と防御力がグンツと上がった。更にデイズの超能力が変身しなくても使えるようになった。

「何したの？」

「神様の真似事ですわ」

その時、火炎弾が飛来して二人を吹き飛ばした。

「きゃあ！？」

「うわあ！？」

地面に転がる二人。

「何なの？」

立ち上がり様に火炎弾が飛んできた方を見る。その先にはドラゴンの姿があった。

「どこの誰かは知らないけど、不意打ちなんていい度胸ね」

ドラゴンが火炎弾を吐く。

ヒナギクはバリアを張って火炎弾を防いだ。

「あいつ何者なんですの？」

「知らないわよ」

ヒナギクはバリアを外してドラゴンへ駆ける。

「危ない！」

ドラゴンは背を向け、太い尻尾でヒナギクを薙ぎ払った。

地面に倒れたヒナギクは徐に立ち上がる。

「桂さん、逃げた方がいいですわ」

「逃げるなら一人で逃げて」

そう言ってヒナギクはドラゴンに向かって行く。

ドラゴンは振り返り火炎弾を吐き出した。

「ぎゃあ！」

ヒナギクは火炎弾の直撃を受けて後方へ吹っ飛んだ。

「桂さん！」

アテネの前に落下するヒナギク。

「逃げないと殺されますわよ？」

「大丈夫」

ヒナギクは立ち上がり、ドラゴンの懐へ駆ける。

ドラゴン は火炎弾を吐いた。

ヒナギクは火炎弾を正宗で弾き飛ばし、ドラゴン を斬り付ける。

「ぐわっ！」

怯むドラゴン。そこに蹴りの追撃。

ドラゴン は後方に倒れた。

（強くなってる）

ヒナギクは立ち上がったドラゴンに連続パンチを浴びせる。

圧倒的なパワーに追い詰められるドラゴン。

「ぐわあああ！」

咆哮と共に巨大化するドラゴン。

「そんな、巨大化するなんて……」

アテネは深い絶望に襲われた。

「あんなの反則よ」

ドラゴン はアテネ目掛けて火炎弾を放った。

「天王州さん！」

ヒナギクはアテネに向かって飛びかかり、変身と同時に巨大化して覆い被さり、火炎弾から彼女を庇った。

「桂さん！？」

「今のうちに逃げて」

走り去るアテネ。

デイジーは立ち上がってドラゴンに向く。

「かかってきなさい」

デイジーは丸で挑発するかのように手招きをした。

怒ったドラゴン は挑発に乗ってデイジーに接近。鋭利な爪でその体を引っかく。

「ぐわっ！」

体から火花が散ると同時に怯むデイジー。

（天州州さんのお陰で確かに私は強くなったけど、相手もかなり強

い)

ドラゴンは透かさず二撃目を浴びせる。

「がはっ！」

後退するデイジー。更に追撃を食らう。

「ぐおっ！」

蹠^{ひき}跟めくデイジーをドラゴンはドロップキックで倒し、マウントポジションで顔面を殴りまくる。一発、二発、三発……と。

やがてデイジーのカラータイマーが点滅を開始した。

(こんなに強い敵は初めて……)

デイジーは自分を超える相手に諦めかけた。

「諦めるな！」

聞き覚えのあるその声に、デイジーはドラゴンの攻撃を受け止め、上下を転がって入れ替わり、ドラゴンを殴りまくる。

(ハヤテくんを置いて逝くなんて出来ない！)

ドラゴンは火炎弾を吐き出した。

「うわっ！」

デイジーは吹っ飛び、地面に落ちた。

立ち上がったドラゴンがデイジーに近付いて蹴脚。デイジーは宙に舞い上がった。

「……？」

空中で誰かに受け止められたデイジーは背後を顧みる。そこには、L77星人のウルトラマンアルスが居た。

「お義父さん！？」

「何をやってる。それでも宇宙警察か？」

「何でお義父さんが地球に？」

「息子が呼んだんだ。一緒に暮らそうってな」

「彼も地球に住んでるんだ」

「ああ、綾崎 ハヤテという少年と一心同体となって平和に暮らしてる」

「今、何て？」

「平和に暮らしてると言っただ」

「その前よ」

「俺は何て言っただ」

「確かハヤテだ」

「しっかり聞いているじゃねえか！」

「危ない！」

迫る火炎弾。アルスはデイジーを抱いたまま素早くかわした。

「俺の力をやる。それで倒せ」

アルスは自分のエネルギーをデイジーに与える。

デイジーのカラータイマーが青を取り戻した。

「有り難う、お義父さん」

デイジーは目にも留まらぬ速さでドラゴンに接近しながら腕を
字にして必殺光線を放った。

ドラゴンは光線を食らい、木っ端微塵に吹き飛んだ。

デイジーは地面ギリギリのところで上昇してそのまま空へ消え去
った。

ある日のこと。朝のホームルームで担任の雪路が言った。

「それじゃあ転入生を紹介するわ。入って」

それに応えて扉が開き、アテネが入ってくる。

「……！？」

驚くヒナギクと、駆け寄ってアテネを抱き締めるハヤテ。

「アーたん、久しぶり！」

「ハヤテなんですよ！？」

「そうだよ。また逢えてよかった」

「ちよつと、何？ 貴方たち知り合いなの？」

「天王州 アテネ。この人は僕のお嫁さんになる人です」

その言葉にアテネは頬を赤らめた。

「ハヤテ、そう言うことは人前で口にしないで下さい！ 恥ずかし

いですわ!」

ダンッ!——ヒナギクが机を強く叩くと同時に立ち上がった。

「ハヤテくん、貴方はこの前、私に好きって言ったじゃない! あれは嘘だったの!？」

「いや、それは……」

「それは本当なの、ハヤテ?」

「うん……」

「それでは私のことはもうどうでもよいと?」

「違うよアーたん。僕は君のことを一番に想ってる」

「ではどうして他の女なんかに?」

「分からない。僕は本当はアーたんの事が大好きなのに、ヒナギクさんを見てると胸がドキドキするんだ」

ハヤテがそう言っていると、頭にヒナギクの声が直接届いた。

『それはもしかすると、貴方の中に居る彼の私に対する気持ちかも知れないわ』

ハヤテは驚き振り返った。

『久し振りね、レオ』

「ヒナギクさん、もしかして……」

ヒナギクは頷いた。

『逢えて嬉しいわ』

『デイジー』

第2話：運命の再会（後書き）

この作品のアテネは、ハヤテの実兄であるイクサに助けられていなかったという設定です。そしてハヤテの両親は原作通りに彼をヤクザに売って逃げたが、イクサが借金を返済して彼を養っています。

ハヤテはナギの執事にはなっていません。

因みに、イクサは雪路と結婚しています。その辺については、後日改めて書きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0866/>

ウルトラウーマンデイジー～コンバットバトラーの世界～

2010年10月21日20時12分発行